

大坂城「真田丸」に関する疑問

－中根家所蔵大坂の陣関連絵図を通して－

福永素久

はじめに

大坂の陣（1614～15年）は、徳川VS豊臣の対立構造以外にも、徳川幕府の権威が西国まで及ぶための戦争であったことが、最近の研究で見えてきている（笠谷2007¹）。冬と夏に分かれ、大坂城周辺以外にも摂津・河内・和泉の広い範囲で行われた一連の戦闘が、幕藩体制を確立する上で1つの重要な事件であった事はいうまでもない。

一連の戦闘のうち、著名なもので真田丸の攻防がある。真田丸と言えば、慶長19年（1614）冬の陣の時、大坂城の南側を守る丸馬出し状²の出丸と築かれた事は知られている（第1図）。通説では真田信繁（幸村）が構築し、自分たちより倍以上の徳川軍に対抗したという事は有名であろう。この出丸は冬の陣終了後、まもなく破却された。しかし信繁の活躍が江戸時代以降、軍記物・時代劇・まんが・アニメ等を通して脚色され、真田幸村としてのヒーロー像を語る上で、真田丸は欠かせない要素になっている。



第1図 大坂城周辺地形図（『大阪上野台地の総合的研究』、2014より）

(1) 中根家所蔵絵図について

現在大分市在住の中根家は、本多平八郎家(忠勝)の家老として近世全般にわたって仕えた。本多家は明治までに11回全国各地を転封している。その間中根家は、4代当主忠真(ただまさ)以降、代々にわたって、藩の記録を収集すると共に城・城下・合戦絵図の写しあるいは、実際現地に赴いて記録を元に絵図を書き上げてきた。現在自宅には、400点あまりの絵図群が残っている。

残っている合戦絵図のうち、大坂の陣に関連する絵図は数点確認されている。この中で寛政年間(1789～1800年)、8代当主忠容(ただかた)が収集した「大坂御陣圖 寫シ」なる6枚セットの絵図は、今回論旨にあたる真田丸についての記載が描かれている。そこで筆者は、一般向けの雑誌『歴史群像』2月号(学研プラス、2015年1月刊行)において当家所蔵の絵図を紹介した³。

その記事の作成途中や経過後の反応を見ていると、筆者は真田丸の形状や築城過程に関していくつかの疑問が生じた。

(2) 通説「真田丸」についての疑問

真田丸に関しての絵図については、中根家以外の全国各地に多く残っている。先行研究においては文献史料が少ないため絵図群をあげての研究が進められ、これを大きくまとめると次の通りである。

①北垣總一郎氏「豊臣時代大坂城「本丸図」と「真田丸」について」

②渡辺武氏「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構えについて」

(①・②とも岡本良一編『大坂城の諸研究』日本城郭史研究論叢8・名著出版、1982年所収⁴)

③高田徹氏「豊臣期大坂城外郭に関する一考察」『戦乱の空間』7所収、戦乱の空間編集委員会、2008年

④坂井尚登氏「大坂城真田丸－絵図・地形図・空中写真によって考察する位置と形状」『城郭史研究』34号、2015年

⑤千田嘉博氏『真田丸の謎』NHK出版新書374、2015年ほか⁵

⑥平山優氏『真田信繁 幸村と呼ばれた男の真実』角川学芸出版、2015年

この中で、6人が共通して使用している絵図は仙台藩伊達家の編纂史料『偃台武鑑』に記載されている「大坂冬の陣配置図」・浅野文庫所蔵『諸国古城之図』所収「摂津真田丸」(第2図)等が上げられる。

他にも類似する絵図群は多いが、北垣氏が指摘するように、一部に江戸時代に広まった軍学をベースに書かれたものが多い(北垣1982)と指摘されている。

通例によると比定地は、大阪市天王寺区にある三光神社(現・宰相山)だった事が多い。実際には「真田山」を冠する地名や学校名が多く見られる。しかし近年の研究では、神社より西側の大阪明星学院付近である事が指摘されている(高田2008など⁶)。

その一方で、出丸の築造過程等についての視点はまだ論じていなかった。

よく研究者に利用される史料の一つ『大坂御陣山口休庵咄』(以下、『休庵咄』と略す)では、信

繁が単独で築いた出丸として挙げている。その一方で『落穂衆』や後述する『長澤聞書』によれば、本来出丸には信繁以外の武将が守るはずだったと解釈ができる。

『休庵咄』は、山口休庵が元々豊臣方につき、戦後本人の回顧に基づき作成されたのが本史料である。『落穂集』⁷は江戸中期の兵学者、大道寺友山重祐（1639～1730）が享保12年（1727）に発表したもので2種類存在する。そのうち1つは徳川家康の出生から大坂夏の陣まで編年体で家康中心の伝記で記されている。

平山優氏は、『休庵咄』が真田丸以外の大坂の陣関連の個所において、当事者が実際に行っていたとは思えない個所があり慎重を要すると指摘した。一方で『落穂集』・『長澤聞書』に関しては、信憑性が高いと指摘している（平山2015）。その1つ『落穂集』所収の真田丸の記事は重友が米山権右衛門という、豊臣方の生き残りからの証言をまとめたものとしている。この権右衛門という人物は、大野治長家臣で冬の陣にて、使者として徳川方へ赴いていた。そこで、氏はこの史料の方が『休庵咄』より当時の状況に近いと指摘している。

以上のように「真田丸」を巡っての先行研究は、今年（2016年）NHKで放送されている大河ドラマに合わせ進んでおり、場所の比定や形状についてある程度見えてきていると言えるだろう。そこで、先行研究の中で2つの疑問を大きくまとめると次のようになる。

・疑問① 真田丸は果たして丸馬出しか

「真田丸＝丸馬出し」の概念は近世以降の絵図で描かれていることが多い。しかし、これらは後世の軍学に基づいている事が考えられる。真田丸の主人公、真田信繁父昌幸は武田氏の家臣だった経緯から武田氏家築城術の特徴である、「丸馬出し」というイメージが独り歩きした感がする。

大坂城・「真田丸」が位置する上町台地は、古代より現在に至るまで開発が進み、原地形を伺うことが難しい。しかし近年、大阪文化財研究所・大阪市歴史博物館等が中心となって、「大阪上町台地の総合的研究」を公表した（脇田・杉本ほか2014⁸）。これは長年にわたる上町台地の調査を考古学、文献史料、歴史地理学の視点に基づいてまとめたもので、その成果として、古代から中世・戦国後期にいたる、台地の地理的復元がなされている。公表された事で、「真田丸」の形状に関して研究が進んだともいえる。

そして、先ほど列挙した先行研究を整理すると、形状は丸馬出し（従来の見解）と方形に近い形と、2つに分かれる事ができるだろう。

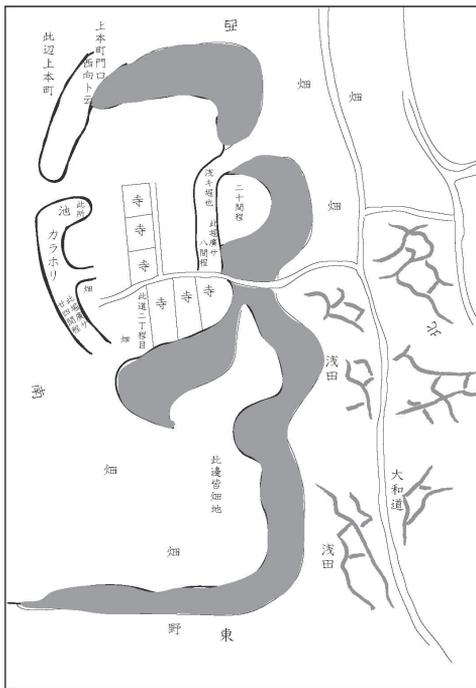
最近の研究を元にした千田氏の指摘では、浅野家文庫所蔵『摂津真田丸』を元にして、出丸の構造は二段構えであると指摘している。さらに、出丸と惣構えとの間にある小曲輪は惣構えから入ってきた敵に対する備えであると考えた。そこで、真田丸は守るためではなくあくまでも攻める目的があった、としている（千田2014⁹）。

千田氏以外に、最近の先行研究では坂井尚登氏の成果が上げられる。坂井氏は現地地形・航空写真・絵図からの考察により、真田丸を検証されている（第3図）。氏の成果によると出丸は、丸馬出し

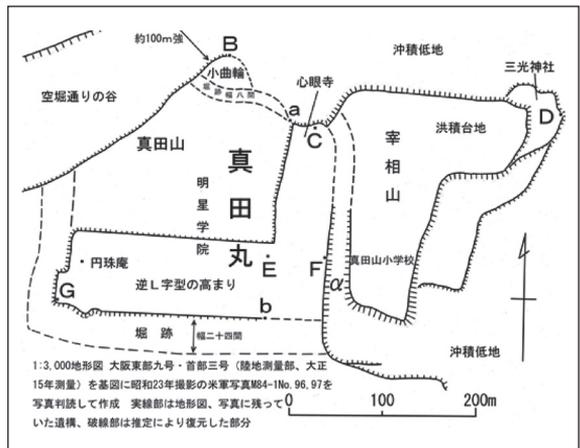
のような形状でなく正方形している。そして、惣構えと千田氏が指摘した小曲輪との間は100m程であり、惣構えから放った火縄銃の射程が曲輪へ届く距離であると考えた。そこで出丸は、孤立無援(千田氏の見解)とはいえないと考えている(坂井2015)。筆者は出丸の構造上、単郭・丸馬出しでないとする坂井氏の見解と同意である。

しかし両者とも根拠としている絵図は、浅野文庫所蔵の『諸国古城絵図』(広島市立中央図書館所蔵)所収の「真田丸」を根拠にしている(第4図)。こちらの絵図については、多くの先行研究者で用いられてきた(北垣1982ほか)。絵図の作成時期にもよるが、陣が終わってから一定の期間を過ぎている事は確かであり、そのまま利用することに危険を伴う。なぜなら、冬の陣終了後徳川・豊臣間で結ばれた和議の条件の1つである、惣構えの埋め立てによっては「真田丸」が徹底的に破却されている可能性があるからだ。

そこで、浅野文庫が元の状態に近いと考えるも「真田丸」は、実際どのような構造だったか、もう一度考慮する必要があるだろう。



第2図 浅野文庫所蔵「撰津真田丸図」(筆者トレース)



第3図 坂井氏案 真田丸復元案(坂井2015より)

・疑問② 「真田丸」という名称について

従来、この出丸は「真田出丸」・「真田丸」という名称は近世軍記物等を通じて使われた。大坂の陣絵図関連の絵図・屏風の中で一番古いとされる、『冬の陣図屏風』(原本は東京国立博物館所蔵¹⁰)は原本が江戸時代初頭に作成されたと考えられる、こちらの名称も「真田出城」と出ている。

しかし『屏風』も含む軍記物が作成された時期は、陣終了後からしばらく時間が経過している。

となると、構築当初の呼び名は異なっていたと考える事ができるのではないか。

それと、大坂の陣当時におかれた信繁の立場を考慮した方がよいだろう。彼は父昌幸ゆずりの戦上手であったかもしれないが、実戦経験が他の大坂方の武将と比べて少ない。さらに、関ヶ原合戦の時には、兄信幸（之）が父の意向により徳川方についていたことが、上方にとってマイナスポイントだったと考えられる。さらにその父は以前、豊臣秀吉から「表裏比興之者」、つまり得体の知れないくわせ者と評された。そういった経緯から、彼の立場は大坂城内において微妙だった事が窺われる。

『落穂集』では、慶長19年（1614）11月15日条に「真田左衛門佐出丸の普請出来致し引移り申二付」と、その頃に出丸が完成したと考えている。この一文の解釈に関して平山氏は、信繁の大坂入城がこの直前となると、出丸の普請時期があまりにも短い事になると指摘した。そこで氏は、既に大坂方がこの場所に出丸を構築する計画だったと、指摘している¹¹。

一方で、大坂方の武将で後藤基次の近習だった長澤九朗兵衛が後に証言した『長澤聞書』¹²（以下『聞書』と略す）によれば、「八町目に真田丸と申す出丸に、長曾（宗）我部と真田と半分持候得とも世間は真田一人の出丸に風聞候」とある。よって、この個所は『落穂集』や『大阪御陣書』にある信繁築造の出丸でないという内容が一致している。

そこで、「真田丸」と呼ばれる出丸の名称は構築当初、そう呼ばれなかった可能性が高い。

そして、生じた2つの疑問を解決できる可能性として、本稿では中根家所蔵の大坂の陣関連絵図を通して「真田丸」を考えてみたい。なお便宜上、中根家の絵図にはアルファベット順に区分した。

1、中根家所蔵大坂の陣関連絵図について

	絵図名	彩色	サイズ (タテ×ヨコ)cm	作成年代	分類、備考	真田丸の表記
1	夏陣 大坂御陣図 其弐	四色	105×117	延宝年間	中根図A図	円形
2	五月六日 大坂陣 其壱	二色	74×80	貞享年間	中根図B図	「真田出丸」のみ
3	夏陣 大坂御陣図	二色			所在不明	
4	大坂夏之陣図	三色			所在不明	
5	夏冬大坂陣之図(大坂御陣図)	四色	77×106	年代不明	中根図C図 宝暦2年作成目録にあり	真田出丸
6	大坂御陣圖 寫シ 壱番	六色	89×98	寛政11(1799)年	中根図D1図・「大坂五戦之図」(国立国会図書館所蔵)などと類似	方形
7	大坂御陣圖 寫シ 弐番	五色	124×80	寛政11(1799)年	中根図D2図	方形
8	大坂御陣圖 寫シ 参番	四色	108×121	寛政11(1799)年	中根図F図	丸馬出
9	大坂御陣圖 寫シ 四番	四色	164×108	寛政11(1799)年	中根図G図	
10	大坂御陣圖 寫シ 五番	五色	121×108	寛政11(1799)年	中根図C1図・夏冬大坂陣之図と類似	表記無し
11	大坂御陣圖 寫シ 六番	五色	102×92	寛政11(1799)年	「七日平野亀井南門庚申堂五戦之圖」・中根H図	

表1 中根家所蔵の大坂の陣関連絵図

(1) 忠真期

中根家所蔵の絵図のうち大坂の陣関連絵図は11点リスト上に残り（現当主・中根忠之氏調べ）、現在所在不明の絵図を除き9点が確認できる。

確認しているだけで一番古いのは、4 代当主忠真の頃に描かれた 2 つの絵図である。双方とも、大坂夏の陣 (1615 年) の徳川・豊臣両軍の配置・戦況を表されている。ただし、城内についての記載は省いており、絵図は全体的に城外で起きた戦いについて表されているのだろう。

①「夏陣大坂陣図 其弐」(中根 A 図)

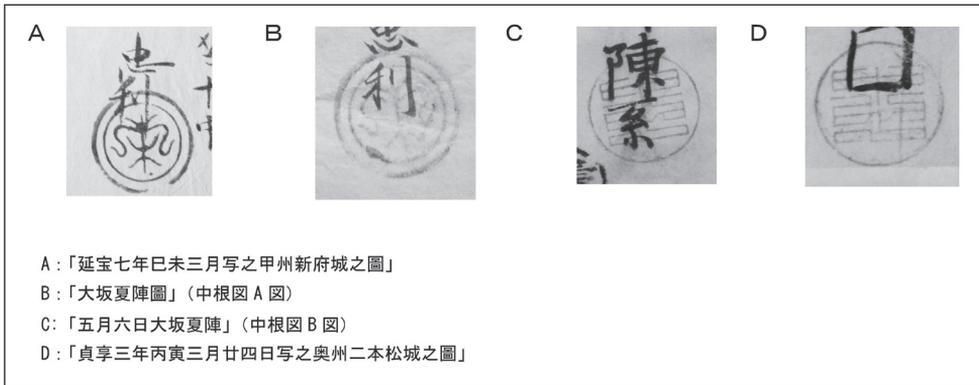
この絵図は、同じころに描かれた絵図 (甲斐新府城図など) の印判 (第 4 図) から忠真と名乗る以前に忠利と称していた頃に作成された事がわかる。よって、時期は延宝 3 年 (1675) から本多家が 大和郡山から陸奥福島に転封となる延宝 7 年 (1679) 頃に作成されたと考えられる。

「真田丸」に関して、A 図においては「真田出丸」と表記している。

②「五月六日 大坂陣 其壹」(中根 B 図)

この絵図は、貞享 3 年 (1686) 頃に描かれた絵図 (陸奥二本松城図など) と同様の印判が押されている事から、忠真が正式に 4 代当主になった貞享年間に作成されたと考えられる。B 図に関しては木津川の上流に「内助刀淵」と呼ばれる大きな池が記載されている。これは古代、大阪湾と上野台地を挟んで大阪平野に広がっていた「河内湖」の名残と考えられる。

B 図では出丸を円形で表しているが、出丸の名称が記載されていない。



第 4 図 忠利・忠真期印判表

(2)「夏冬大坂夏陣図 (大坂御陣図)」(中根 C 図)

この絵図は、夏冬陣で徳川・豊臣両方の視点で捉えた絵図で、冬の陣を△・夏の陣を○で表し戦況を伝えている。この絵図には印判がないことから、作成時期が不明だ。この絵図中には「慶長十九年甲寅元和元年乙卯大坂御陣図」とあり、この絵図本来のタイトルと考えられる。また C 図は、宝暦 2 年 (1752) に作成された同家史料の絵図目録『諸国絵図 覚帳』において、絵図名である、「大坂御陣図」が記されているため、宝暦 2 年以前からあったと考えられる。おそらく絵図は、5 代当主忠豪 (ただたけ) から、6 代当主言忠 (つねただ) の頃に作成されたと推測できる。

後年に絵図を納めた紙袋には、本多美濃守ある。美濃守こと本多家 2 代当主忠政は大坂の陣に出陣している。おそらく図は本人の活躍を後世に残すために作成されたのであろう。

「真田丸」はこの絵図中、「真田出城」と表記されている。

(3) 忠容期

次に見られるのが、8代当主忠容の時期である。この時本多家は三河岡崎（明和6年（1769）以降）に転封している。彼は天明元年（1781）に家老職を任じられ藩政改革を実施したことで知られている。実は中根家が所蔵する城絵図において、最も多く集めた当主が4代と8代であろう。

彼が収集した絵図の中に、『大坂之陣圖 寫シ』（以下、『寫図』と略す）なる6枚セットの絵図がある。この絵図が中根家に伝わった経緯は、絵図が入った袋に貼られた書付によると、中根家に伝わるまで以下のような流れが見られる。

此繪圖候処珍敷秘書同様之繪圖故、留守居役奥村孝右衛門内縁者外ふ借出、御出入役之紙屋平右衛門へ令拝見候処、私方ニも色々繪圖者写有之候得共、大坂ニ而其繪ヲ拝見不仕候、何卒此繪圖者御写置可被成候段之旨申、私義も何卒写置度与被申出候ニ付、然ニ留守居ニ而二枚、紙屋平右衛門方ニ而二枚、此方ニ而二枚預写六枚写取置、本繪圖者被差戻、朝留守居役へ六枚、平右衛門方ニ六枚、此方へ六枚写被置候事、

寛政十一年^(欠損) 未 三月上旬 写之趣候、

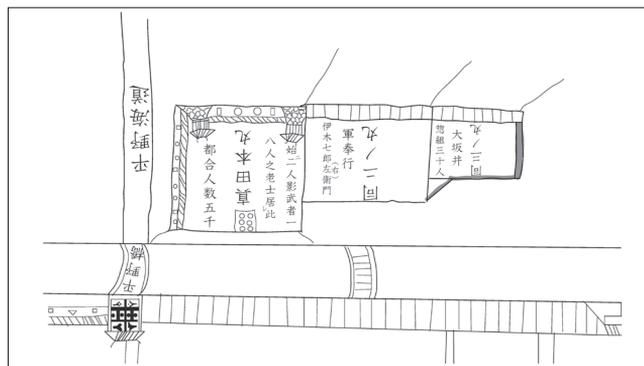
松平左近将監内

大坂蔵屋敷 井上弥左衛門

ここで出てくる、松平左近将監とは当時の下総大多喜藩主松平乗邑（のりさと）である。

寛政11年（1799）3月に完成した六枚の絵図は、元々同藩大坂蔵屋敷井上弥左衛門の同僚である、奥村孝右衛門の親戚と出入役紙屋平右衛門と中根家がそれぞれ持っていた大坂の陣関連の絵図を写したものである。文中に「秘書同様之繪圖故」とある事から、奥村が持っていた絵図は、井上らが見た中で大変珍しかったことが窺われる。また、この絵図セットは他藩をまたいで製作されたことが判り、忠容の交流を窺わせるものだと言えるだろう。また彼はこの年の春に隠居をしているため、『寫図』がこの直前に製作されたと考えられる。6枚の詳細は次の通りである。

① 「壺番」(中根D1図)



第5図 『寫図』壺番「真田丸」部分（筆者トレース）

この絵図は、大坂方の視点で描かれている。大坂城の外堀が埋められてない事から、絵図の視点を裏付ける事が可能であろう。この絵図の主点は城内の武将の配置に置いている。そして城の南側に「真田丸」(第5図)が描かれていた。

この絵図による「真田丸」は、平野口から平野海(街)道に沿って描かれている。また出丸は全体的に方形の形をしており、従来の見解と異なる様相をしている。そして、内部は3つに区切られているようだ。

街道に沿って、東側が一番大きく描かれており、「真田本丸」として記されている。「本丸」は東から南にかけて、挟間の付いた土堀が巡り南側両サイドに櫓台が付けられている。西に向けて曲輪は「二ノ丸」「三ノ丸」と続き、「本丸」以外板塀となって描き表されていた。つまり、縄張りは主郭(本丸)をコーナーに階段状に曲輪を配置する連郭式という、構造で「真田丸」が表記している。

曲輪から線が伸び、「三ノ丸」の西側から北側かけての端が青く塗られている。おそらくこれらは、線を切岸(あるいは土塁)、青の部分を水堀として表しているのだろう。

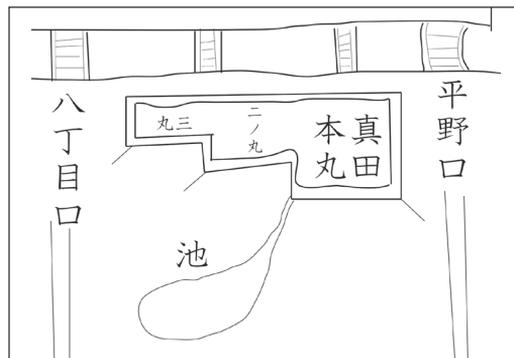
「真田本丸」には、「始二人影武者一八人之老士居此 都合人数五千」と記されている。ここでいう武者2人は、真田信繁と影武者がもう1人となり、さらに『聞書』に合わせると老士18人の中の1人に長宗我部盛親を指す事になる。

「二ノ丸」には、軍(いくさ)奉行として伊木七郎左衛門(遠雄)が配置されているように描かれている。伊木遠雄は豊臣秀吉の元近習で、関ヶ原合戦の後出奔、大坂の陣では浪人衆として戻ってきている。なので、絵図中の伊木は遠雄本人を指し、実際七郎右衛門と称しているのだから、絵図の名前が誤記であろう。

この中根D1図に類似する絵図としては、大阪城天守閣所蔵の『大坂陥城之旧図 其一』がある。この絵図は、天保年間(1830~43)に写された。

②「弍番」(中根D2図)

豊臣方の視点で描かれた「壺番」に対し、この絵図は徳川方の視点で描かれている。そして描かれている範囲もD1図よりも広く、四天王寺まで記されている事がわかる。このためか、真田丸はD1図と比べ、同じく四角で縄張りが連郭式に描かれているものの、簡略化して表記されている。「弍番」の絵図は、表記されている「真田丸」の形状から「壺番」と同様『大坂陥城之旧図』や『大坂五戦之図』と同系統だといえるだろう。

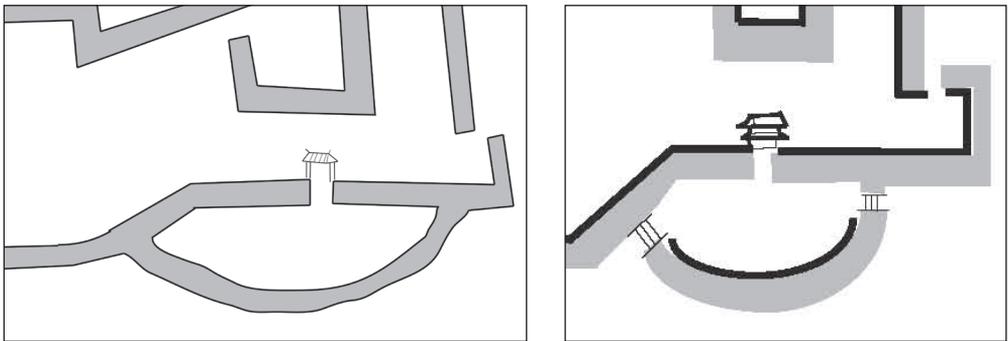


第6図 『寫図』2番「真田丸」部分 (筆者トレース)

③「参番」（中根E図）

この絵図は、徳川・豊臣両方の視点で描かれている。「壺番」・「貳番」と比べて、大坂城が本丸・二の丸・三の丸と詳細に描かれていることが特徴だ。

この絵図にも、「真田丸」が描かれている。しかし「参番」の場合、今までと比べて出丸は楕円形に近い形で描かれている。楕円形に近い「真田丸」としては、浅野文庫が所蔵していたもう1枚の絵図『大坂城惣構図』¹³や『偃台武鑑』所収の絵図との類似が見られる。『偃台武鑑』に描かれた出丸は曲輪が大きく2つに分けられ、その内部が柵と木戸で区切られている。一方でこのE図は、類似する絵図と比べて出丸が簡略化していた可能性がある。



第7図 『寫図』参番（左）と、浅野文庫所蔵「大坂惣構図」（右）「真田丸」（筆者トレース）

④「四番」（中根F図）

この絵図には、「壺番」～「参番」よりも広範囲に描かれている。さらに、徳川家康が夏の陣の時に布陣した四天王寺付近の所では、「大御所様大坂城天守江火掛」とある。また大坂城本丸あたりに、「秀頼公切腹」とあることから「四番」は夏の陣の戦況を示したものだと言えるだろう。

⑤「五番」（中根C1図）

この絵図は、夏の陣において徳川方の布陣図を示したものである。慶長20年5月の様子を描いたものであるから、ここでは「真田丸」が表記されていない。

⑥「六番」（中根G図）

絵図に「七日平野亀井平野南門庚申堂五戦之圖」と記されているため、「六番」は夏の陣の様子を描かれていると考えられる。

よって「寫図」は、「壺番」から「参番」が冬の陣、「四番」から「六番」が夏の陣の様子を描いている事がわかる。

(4) 中根家所蔵絵図群を通しての検証

以上のようにまとめると、忠容期に作成された『大坂之陣圖 寫シ』は、中根家以外で現存している大坂の陣関連の絵図と同系列が多い。つまり、『寫図』や同系統の絵図群は既に寛政年間出回っている事がわかる。そこで、『寫図』の6枚が由来書に記された「秘書同様」とは考えにくい。

また由来書には、三人それぞれの絵図 2 枚ずつ複写したとある。ここで、本来誰の絵図が 6 枚のうちどれを持っていたのか気になるところだが、特定することは難しい。ただし、「寫図」五番の絵図が忠貞期以降に作成された「夏冬大坂陣之図」(中根 C 図)と類似しているため、五番の図が少なくとも中根家が本来所有していた絵図だと考えられる。

2、「真田丸」について

以上で、中根家所蔵の大坂の陣関連絵図をあげてきた。本章では絵図史料を参考に「真田丸」について、検証していきたい。

ここでは、名称・形状についても追ってみる事にする。ただしこちらも一次史料から散見する事は難しい。むしろ、大坂方からの史料も当然皆無に等しく謎が多い。ここでは、軍記物等から見てみたい。

(1)「真田丸」の名称の変遷について

名称の変遷について、忠容期に作成された「寫図」と類似した絵図が既に広まっていた事は、感が否めない。しかし冒頭でも述べた『長澤聞書』の中では、本来信繁が築いていなかったと匂わせる記述である。では、他の史料からどのように表記されているのか見るとする(表 2)。

	史料・絵図名	成立時期	作成者	出丸の名称	備考
1	大坂物語 上	元和元年(1615)		「真田左衛門督が盾籠もる寨」	国立国会図書館所蔵
2	大坂御陣山口休庵咄			真田取出・真田出城	
3	宇津木泰繁覚書	元和元年(1615)	宇津木治部右衛門泰繁	名称なし	大阪城天守閣所蔵・木保右京亮宛
4	難波戦記	寛文12年(1672)	万年頼方・二階堂行憲	巽方出丸	原本
5	大坂御陣覚書			真田左衛門の出丸・真田丸	子爵松平定晴本
6	越前家覚書			真田出丸	出丸笹曲輪を賣め取りとある。
7	中根 A 図	貞享年間	中根忠真	真田出丸	「五月六日 大坂陣 其老」
8	難波戦記大全		田丸源房入道	真田丸	巻十五所収
9	中根 C 図	作成年代不明	作成者不明	真田出城	「夏冬大坂陣之圖」
10	落穂集	享保12年(1727)	大道寺友山重友	出丸	早稲田大学デジタルアーカイブス
11	中根 D 1 図	寛政11年(1799)	井上弥左衛門	真田本丸・同二の丸・同三の丸	「大坂御陣圖 寫」老番
12	中根 D 2 図	寛政11年(1799)	井上弥左衛門	真田本丸・二の丸・三の丸	「大坂御陣圖 寫」忒番
13	大坂御陣覚書 上			真田丸	百間四方の出丸と記す。
14	増補難波戦記	明治20年(1887)	西村寅次郎	真田ヶ丸	出版元: 雙々堂

※『大坂物語』・『難波戦記』(大全・増補)は国立国会図書館所蔵から典拠
 ※大坂御陣山口休庵咄・宇津木泰繁覚書・大坂御陣覚書(上も含む)は『大日本史料』家わけ第12編之十六所収から典拠
 ※宇津木泰繁覚書は特別展『真田幸村と大坂の陣』図録、大阪城天守閣、2006年所収より典拠

表 2 史料からみる、「真田丸」名称の変遷

『落穂集』に記載している、慶長19年11月15日の項を改めて見ると

- 一、城方真田左衛門佐、出丸の普請出来致し引移り申二付、誰成共我等相談相手に被仰付給度旨相願ひ候二付、黄母衣衆の中より伊木七郎右衛門を真田に加へ被申候と也、石川肥後守義ハ其身真田に相断り、願を以て此丸に籠り候由

とあり、築造過程は本文第1章で紹介したように、信繁が大坂へ入城する以前から出丸の普請が行われた可能性が高い。そこで、「真田左衛門佐出丸…」という分も、真田左衛門佐信繁が、出丸の普請が完成したので移った、と解釈することが可能だろう。

軍記物の中で最も古い記述の一つとして、『大坂物語』上がある。これは、近世以降他のものと同様に増版を重ねた。大坂の陣が終わった直後（元和元年）に初版された史料によれば、「真田左衛門督が盾籠もる寨（とりで）」として記されている。そして、『難波戦記』（初版寛文12年・1672）では「異方出丸」と書かれており、大坂の陣終了からしばらくの間、出丸が「真田丸」と表記されていない事になる。

一方で『休庵咄』によれば、出丸は「真田取出」ないし「真田出城」として出てくる。しかし前述した2つの軍記物、そして冒頭の長澤九郎右衛門の証言などから、この史料は後世に脚色された可能性がある。

また、冬の陣で出丸に対峙した越前松平家に伝わる『大坂御陣覚書』・『越前家覚書』¹⁴には出丸を「真田出丸」として表記されている。

寛文12年に作成された『難波戦記』は、後に増補された。増補されて以降の『戦記』では、「真田丸」として書かれている。中根家の絵図でも忠容期に作成された時期には既に、出丸が「真田…」と表記されていた。

（2）「真田丸」の形状について

形状について、絵図・文献によれば中根D図系統2種類の絵図でも見られたように、出丸の形が四角である。史料・軍記物では『大坂御陣覚書』上によると「百間四方の出丸」として出てきている。百間という大きさは、京間が普及し始めた時期と当史料作成時期がほぼ同時期とみて換算すると約180m四方、京間（1間＝約1.8m）が全国的に広まる以前の換算だと約200m四方となり、かなりの規模だった事になる。

さらに『山口休庵御咄』によれば、「三方にから堀をほり、堀を一重かけ、堀の向とから堀の中と、堀きわニさくを三重ニ付、所々櫓せいろうを上ケ、堀のうで木の通りニは、七尺（約2m）の武者走りを致し」とあり、内部の事が詳細に記されている。

こうしてみると、中根家絵図群や陣が終わって比較的近い時期に作成された軍記物・記録集をみると、出丸は当初から丸馬出しとして描かれていない事がわかる。

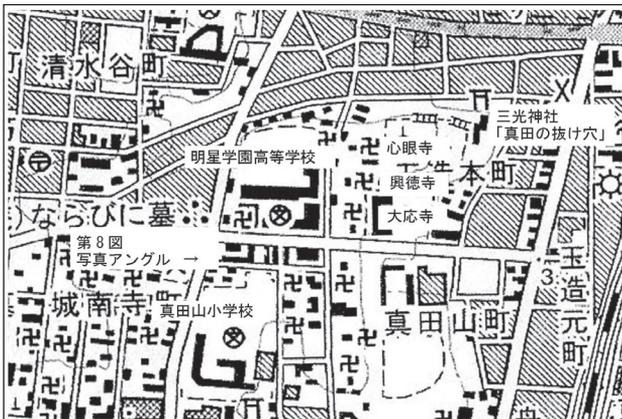
逆に従来の見解の丸馬出しとして、。文字史料に出てくるのが『小幡由緒書』¹⁵である。当時大坂方にいながら、徳川方に内通していた小幡景憲の項に加賀前田勢が「真田丸」へ攻め入った箇所で、「さなだ持口丸馬だしへおしよせ申候」とある。しかし、この由緒書は後年による修正もかなり加えられている可能性が高い。

「真田丸」は大坂城惣構南側にあり、大きな曲輪と「篠山」¹⁶と呼ばれる小さな曲輪で構成されていたと、考えられている。この様相は浅野文庫「真田丸」からも窺うことができるだろう。

出丸は冬の陣終了後、豊臣・徳川間の和議により徹底的に破却された。そして、近世以降の開発により、出丸跡の現況を見ることは難しい。しかし、近年の研究によって（特に高田氏・千田氏・坂井氏の先行研究など）、形状や配置が見えつつある。そこで、筆者は先行の研究を踏まえつつ、2015年8月現地へ赴いた（第8-1図）。

出丸を巡っている堀について、中根家絵図群には表記されていない。そこで浅野家文庫に表れている外堀は、坂井氏が推定している部分で出丸側と外堀側で2m以上の段差が見られる。つづいて東側のライン、現在の真田山小学校と出丸側にも氏が推測されている堀跡が見ることができる。

現在、真田幸村の銅像が立っている宰相山は、坂井氏の復元案によると、出丸本体を守る外郭ラインだったとしている。銅像裏にある「真田の抜け穴」は、元々「真田丸」を攻撃する際に徳川方が構築した塹壕という説が有力視されている¹⁷。そこで、当時宰相山付近は出丸の郭外に近い環境であったと言えるだろう。



第8-1図
「真田丸周辺地形図¹⁸」



第8-2図
坂井氏想定「真田丸」南側ライン
(中央は堀部分)

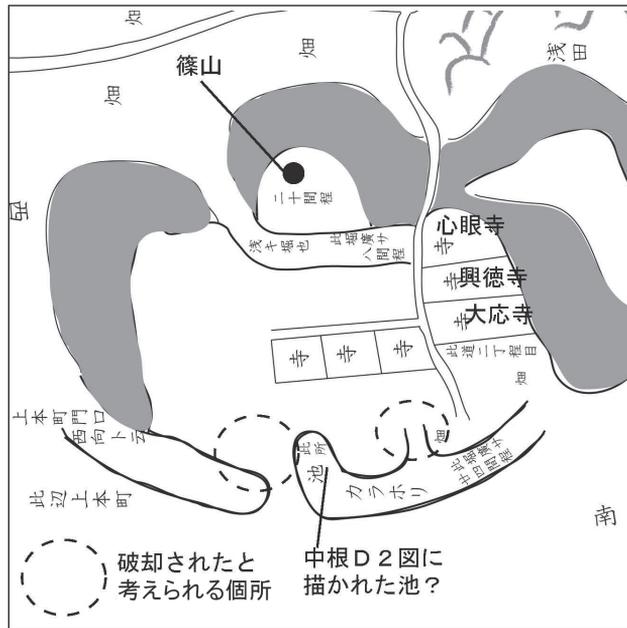
3、考察

(1) 中根家絵図群から見た「真田丸」

D系統2種類の絵図については、形状がどれも丸馬出しでない事がわかる。

丸馬出しと考えない「真田丸」は、宰相山（現・三光神社）と真田山（現・明星学園付近）にあった複郭構造となっている。『寫図』の場合出丸が三段に構成されているが、従来の見解では実際の形でない事はわかる。おそらく2種類の絵図は、複郭の構造を模式的に表記したと理解できるだろう。

またD2図に表記されていた「池」について、従来の研究により類似する絵図等からも表記されている池は、出丸の南方にある味原池と解釈されてきた。これに対し坂井氏は、池が出丸の堀跡と指摘した。浅野文庫の「絵図」には、空堀部分に「此所池」とあることから裏付ける事ができよう（第9図）。しかし冒頭でも言及したように和議によって、出丸は徹底的に破壊された可能性がある。筆者が破却部分として想定しているのは、『諸国古城絵図』を元に推測すると、東側から伸びた空堀が途中で北側に折れる部分と池が表記されている個所だと、考えている。本文第2章で取り上げたこの池が果たして堀の残りの部分か、自然によるものか現存していなので判断は難しい。



第9図 「撰津真田丸図」筆者解釈

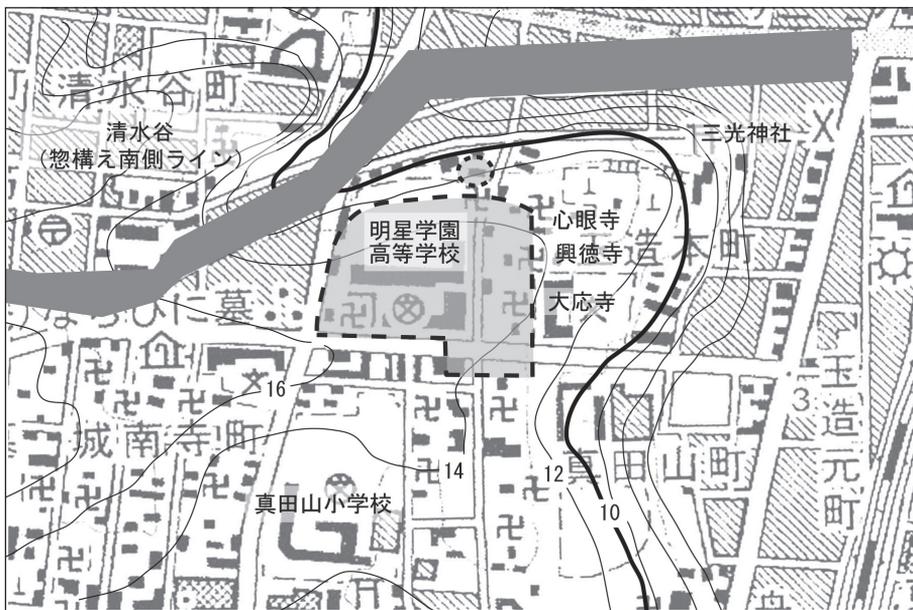
中根家絵図について筆者は、前述したように当家史料『寫図』を雑誌『歴史群像』にて紹介した。これに対し平山氏は、当史料特にD系統の絵図2枚が、全国に広く類似絵図が出回っている『大坂五戦之図』や『大坂陥城之旧図』群（『寫図』と同様の6枚セット）と酷似している。そこで新史料として絵図の信憑性は低い、と指摘された¹⁹。

しかし本論第2章で述べられているように、筆者は最初から当史料を新史料として見ていたわけ

でもない事が、本文でも触れている。さらに、中根C1図(『寫図』五番)に関しては、中根家が以前から所有していた絵図(中根C図)と考えられる事から、決して『大坂五戦之図』の完全なコピーとは言えない。

また、D系統の2種類の絵図について、平山氏が挙げた既出の2つの絵図と同系統であることは確かである。つまり、これらの絵図群のベースとなる元の絵図は、同一という事が考えられるのだ。また、『大坂五戦之図』の作成年代が不詳となれば、寛政11年作成の『寫図』が、全国各地に残る同系統の史料として1つの指標となるともいえる。

いずれにせよ中根図はじめ全国に類似する絵図は、本来の縄張りに近い形状で描かれているのではないか。絵図からは坂井氏らの研究成果を合わせて、形状について確認できたと言えるだろう。



第10図 「真田丸」想定範囲私案(破線枠内、等高線は『大阪上町台地の総合的な研究』2014より)

そこで出丸は、中根家絵図や同系統の絵図、『大坂御陣覚書』記載の「百間四方」を出丸全体の範囲とすると、以下のような復元案ができると考えられる(第10図)。

中根家D図の「真田丸」は、主郭が副郭より大きく書かれている。大阪文化財研究所が公表した地形図と照らし合わせてみると、まず主郭があったと考えられる明星学園付近は、標高が10mとなっている。『諸国古城絵図』にも記載し、現存している寺院より西側は、現・玉造元町に向かって崖となっている。一番攻めにくい場所に主郭をおくのが、城郭縄張りの通例と考えるならば、主郭は北の清水谷(惣構外堀)と南の味原谷の入口で標高が高い寺院が建ち並んでいるあたりと考えられる。

標高12mの等高線が途中で北へカーブしている場所があり、この箇所はおそらく清水谷の支谷があったと考えられる。その谷のでき始めの延長線上に位置するが、明星学園と大応寺の間である。となると、地形上の制約があっても主郭より副郭の方が狭かったと見ることができるだろう。

よって位置については、心眼寺から明星学園付近の範囲であった事、形状については「丸馬出し」でない事が見えてくる。そして、中根D系統の絵図によると、副郭の範囲が主郭より狭く描かれている。よって、主郭との間に横矢掛け²⁰があったと考える事が出来るだろう。そして、北側を除く三方には堀が巡っていた。一方で南側は、支谷の延長線上にあたるため堀底に水がたまり、池として絵図に描かれたのではないだろうか。ただし詳細については、冬の陣終了後の破却や近世以降の開発などにより不明瞭な部分が多い。これに関しては今後の検討が必要になるだろう。今後の研究成果を期待したい。

（2）「真田丸」の名称から

中根家絵図群ではどれも、「真田…」と表記されていた。これは描かれた時期からすると、名称はそう呼ばれても仕方ないと考えられる。しかし、各軍記物・武将の証言などにより、当初から「真田」と呼ばれていなかった事がわかった。これは『長澤聞書』や『落穂集』などの記録から、当初信繁が入る前から大坂城惣構南側に出丸を構築しようとしていた。しかも本人以外（『聞書』では、後藤又兵衛が入城予定）の武将が入る予定だった。しかし、完成直前に信繁がその出丸に入る事になった、というストーリーが見えてくる。ただ、信繁自身が大坂でおかれた微妙な立場関係が原因となって、表向きは伊木遠雄が軍監として出丸へ入った。そして信繁は、そのサブとして遠雄と共に入ったと解釈できるだろう。

では、いつから出丸に「真田」の名称がつくことになったのだろうか。貞享年間（1684～87）作成の中根B図には「真田出丸」と表記しており、1680年代頃までに「真田丸」の名が浸透しつつあったことがわかる。

以上のように、「真田丸」は信繁が築いたとは考えにくい。彼が出丸に入ったことで、さらに改修がなされ千田氏の指摘のように「攻めの砦」となったのではないだろうか。このため、陣が終わってすぐ出丸には「真田丸」と呼ばれず、信繁が幸村として軍記物等で英雄化されるにつれて、真田幸村が築いた砦＝真田丸となっていったのであろう。

これは、近世以降に描かれた丸馬出しの「真田丸」としての形状にも深く関わる。出丸が四角形をしている中根家の絵図群のように、すでに類似する絵図は広く頒布されていた。ベースとなった絵図に描かれた出丸は丸馬出しに表記されていなかったとすると、千田氏や坂井氏の見解と合致する。それが近世以降、真田＝武田＝武田の城といえば丸馬出しなので、真田丸は丸馬出しとして認識されていったと考えられる。

そこで近世以降において、描かれた大坂の陣を表した絵図にも影響が出て、「真田丸」を概念的に表すアイコンとして丸馬出しが使われたのではないだろうか。

おわりに

今年（2016年）のNHK大河ドラマでは、信繁を主人公にしたものが、現在午後8時に放送され

ている。筆者が大阪へ赴いた去年の夏、幸村銅像がある三光神社付近には、まばらながら地図を携えて歩く人を何人か見た。今年はさらに訪れる方が多いだろう。

筆者はこれを機会に、「真田丸」について多くの人の関心を持ってもらえることで、謎多い出丸の解明に繋がればと考える。

確かに、信繁はこの出丸で果敢に戦った²¹。それは、信繁が近世の人々にとって公権力（幕府）相手に戦った、カリスマ性を持つ事に繋がる。それ故に、時代が下り物語等で語り継がれ真田幸村としての武将像は確立していったのだろう。しかし、実像は信繁が当時おかれていた立場が大坂城内において微妙だったことがわかる。そこで、一次史料がないながらも陣直後の文献等からは、「真田丸」としてのスタートは決して、幸村（信繁）築造ではない事が本論から窺われた。

それは、形も丸馬出しでないという事が、最近の研究でも見えてきている。これは、中根家絵図群をはじめ、全国的に類似する絵図の再評価にもつながるのではないか。

当時信繁自身の心情を察することはできないが、ここ（大坂）で奮戦しないと、豊臣家ないし自身も生き残れないという考えがあったのだろう。その為果敢に戦った事により、全国各地に残る幸村伝説²²と共に丸馬出しは、幸村が作った丸馬出しという概念が人々の間に定着していったのである。

そこで中根家絵図群は、出丸の本来の形状から丸馬出しへ、通説が変化した過程を示す史料だと付け加えておきたい。

【追記】

本文での「真田丸」の表記については、筆者は、当初からこの出丸を真田丸と呼んでなかったと考えていたため「」をつけて表記した。

最後に調査の際『寫図』をはじめ、中根家所蔵の絵図群の閲覧を快諾して下さった、中根忠之氏には深く御礼申し上げます。また本文作成に関して、情報を提供いただいた学研プラス（旧学研パブリッシング）『歴史群像』編集部山上至人氏をはじめ多くの方々のご協力には感謝いたします。

-
- 1 笠谷和比古 戦争の日本史17『関ヶ原合戦と大坂の陣』、吉川弘文館、2007年
 - 2 本来、馬出しは虎口に押し寄せる敵を迎え撃つための防御陣地で、半月状のものを丸馬出しと呼ぶ。
 - 3 拙稿「新史料から再検証する真田丸の構造 真田丸は丸馬出しではなかった!？」『歴史群像』2015年2月号、学研パブリッシング（現・学研プラス）、2015年。なお当家史料は他にも「大名家家老に伝わる「真田丸絵図」」学研ムック『真田戦記』、歴史群像編集部、2015年にも紹介している。
 - 4 渡辺氏の論文の初出は、『難波宮址の研究』7、財団法人大阪市文化財協会、1981年所収
 - 5 「新説! 「真田丸」は孤立無援の二重構造の巨大な要塞だった!」『歴史人』4月号、KKベストセラーズ、2015年
 - 6 従来の見解では、宰相山から真田山の範囲と考えられていた（渡辺1982など）。
 - 7 史料原本は 早稲田大学古典籍データベース

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cnbndbn=%97%8E%95%E4%8FW> より閲覧が可能。

- 8 脇田修・杉本厚典編『大阪上町台地の総合的研究 東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型』
大阪市博物館協会・大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、2014年
- 9 註4文献参照
- 10 本館所蔵は江戸後期から幕末にかけての模写である。原本は狩野興以（?～1636）作成の下絵または完成品の模写と考えられる。大阪城天守閣にも類似品があるが、こちらは昭和60年（1985）から平成2年（1990）にかけて、城郭研究家竹内勇吉氏による模写。
- 11 平山優氏『真田信繁 幸村と呼ばれた男の真実』、2015年
- 12 『史籍集覧』第16巻、臨川書店、1984年所収
- 13 他にも、『金城見聞録』所収の「大坂城慶長年間の古地図」や『浪速戦闘之図』所収の「大坂冬の陣図」（大阪城天守閣所蔵）に類似した「真田丸」が描かれている。
- 14 大日本史料第12編所収。越前覚書は、越前福井藩松平家がまとめたもの。越前北の庄城主松平忠直は、冬の陣の際加賀前田勢と共に「真田丸」へ押し入った事で知られる。
- 15 大日本史料第12編之16所収
- 16 「篠山」は「真田丸」と玉造口の間にあった曲輪で、各文献にも「笹山」・「笹山曲輪」と出てくる。現状は消滅しているが、先行の研究によって明星学園高等学校すぐ北側にあったと、考えられている。
- 17 橋場日明「真田伝説」（学研ムック『真田戦記』、学研プラス、2015年）、千田嘉博『真田丸の謎』、2015年など
- 18 国土地理院発行2万5000分の1地形図「大阪東北部」を使用。
- 19 註11文献参照
確認当時、筆者や担当編集者は当史料を新史料と認識していなかった。そのため、記事の内容から見る限り絵図を新史料と見なしていない。しかし、記事の見出しが「新史料」とついてしまった。これは、この見出し部分を校正の段階で気づいておればと、反省している。そこで当史料の紹介を補足する形として、この年の12月学研ムックより『真田戦記』の中で記事を書いた。
- 20 横矢掛けとは、正面曲輪切岸を前方へ突き出した事により、切岸によじ登ってきた敵を、正面と側面から攻撃することができる防御施設の事。
- 21 『日記雑録』慶長20年（1615）6月11日頃
- 22 幸村にまつわる伝承は、陣後の生存説をはじめ全国各地に多く残されている。大分市津守にある碓山には、信繁の愛馬だった「真田栗毛」を祀った墓が伝わっている。この馬は夏の陣において功績のあった松平忠直が幕府より拝領されたとされ、後に彼が不行跡を理由に豊後へ流された際、「真田栗毛」を当地へ連れてきたという伝承にまつわる。